

会 議 録

名 称	都留市文化財審議会第2回会議	回数	第2回
日 時	令和8年2月10日（火）10時00分～11時30分		
場 所	ミュージアム都留研修室		
出席者	<p>【文審委員】井上委員（副会長）、大澤委員、小佐野委員、北川委員、 小林委員（会長）、藤江委員</p> <p>【牛石委員】末木委員（会長）、新津委員、村石委員、佐野委員</p> <p>【オブザーバー】山梨県文化振興・文化財課課長補佐宮里、文化財主事鷹野</p> <p>【事務局】教育長小林、生涯学習課長補佐鈴木、文化振興担当リーガー知念、 文化振興担当下田、文化振興担当小島、文化振興担当三浦</p>		
欠席者	【文審委員】戸澤委員、堀内委員、松田委員、森屋委員		
議事内容	次のとおり		
<p>1. 開会（司会進行：生涯学習課長鈴木）</p> <p>2. 教育長あいさつ</p> <p>3. 委員紹介</p> <p>4. 議事（事務局）</p> <p>ア 資料1 「牛石遺跡発掘調査」について事務局より説明。</p> <p>補足資料 環状集落・列石について佐野委員より説明。</p> <p>⇒文審委員（以下、文審）と牛石委員（以下、牛石）の意見交換を実施</p> <p>【委員からの主な質問・意見】</p> <p>（文審）環状列石は儀礼目的で使用されたのか。他に目的はあったのか。</p> <p>（牛石）判断は難しい。縄文時代には石を用いた施設が造られており、大湯環状列石の調査例では墓の可能性も指摘されている。しかし牛石では、過去の調査で列石下から骨や穴が確認されておらず、儀礼に用いられた可能性が高いと考えられる。</p> <p>（牛石）当時は大規模集団が減少し、環境等の影響により小規模化が進んだ時代である。分散した集団が年に数回集まり、祭祀や儀礼を行う場として環状列石が利用されたとする説もある。</p> <p>（文審）前回の調査担当者は富士山や冬至との関係を示唆していたが、見解はどうか。</p> <p>（牛石）富士山もだが、三つ峠がより重要なポイントと考えられる。小林達雄先生のランドスケープ論のように、景観を重視して遺跡が造られた可能性がある。県内には、甲斐駒ヶ岳に日が沈む位置にある遺跡もあり、列石がカレンダー的役割を持っていた可能性も否定できない。</p> <p>（文審）環状列石は住居を含む遺跡との説明と、宗教施設としての説明があったが、どちらに該当するのか。</p>			

(牛石) 牛石遺跡では未解明である。群馬県では非伝統的集落内に列石がある例もあれば、伝統的な遺跡もあるため一概には言えない。ただし、この時代は集落が小規模化している。

(文審) 現段階では判断できないという理解でよいか。

(牛石) 双方の機能を併せ持っていた可能性がある。

(牛石) こうした集落は約 500 年にわたり営まれることもあり、祭祀の内容は段階的にしか把握できない。集落形成には信仰的要素があったと考えられるが、牛石でどのような祭祀が行われたかは不明である。過去の調査報告書が未作成のため国史跡指定もできない。今後はデータ収集を進め、今回の調査結果と環状列石の関連を検証する必要がある。保存方法についても、盛土・非掘削・記録保存など多様な手法があり、理解を得るための報告書作成が重要である。

(牛石) 資料 8 ページの図は過去の調査を反映した推定図であり、列石周辺の状況は未解明である。他の遺構が台地上にどのように広がるかの検討は重要だが、全面調査が必ずしも適切とは限らない。試掘・本調査の成果を踏まえ、多方面で保存方法を協議する必要がある。多くの可能性を持つ場所であるとの認識のもと、適切な保存方法を検討すべきである。

(文審) 土地区画整理後すぐに埋め戻されたため地域住民の認知度は低い。当該エリアを含む宝地区には、小山田氏の中津森館や江戸期の近ヶ坂往還による絹織物流通など多様な歴史文化がある。遺跡と併せて包括的に保存できることが望ましい。

(文審) 県内に配石遺構はいくつあるのか。

(牛石) この規模のものは県内で唯一である。

(牛石) 線状の配石遺構は県内にも見られるが、サークル状は牛石遺跡のみである。

(文審) 関連遺構すべての保存が理想だが、開発上困難ではないか。少なくとも列石部分の保護が望ましい。

(牛石) 巨礫の調査により、資料図左上付近で第三次調査で確認した第一配石が保存されていることが確認された。過去写真では地表との距離が近かったが、今回の調査で盛土があり配石が残存していることを確認した。環状列石の位置推定には約 1m の誤差が見込まれるが、要所的な再調査により特定可能であり、指定に向けた調査が必要となる。

(文審) 富士山噴火に関連する火山灰層は確認されているか。

(牛石) 縄文時代後期の大室スコリアや中期の曾利スコリアが点在しており、時代判断の指標となっている。

(文審) 縄文期遺跡の広がりを確認する方法はあるか。

(牛石) エリア東側では縄文関連遺物は少ない。現在奈良・平安層を確認しており、その下層の有無が課題である。試掘では中期土器は多くないが、今後の調査で明確になる可能性がある。

⇒事務局 用地交渉の都合により A 区の一部は縄文層まで掘削できていない。深掘箇所では前期遺物がまばらに確認されている。

(牛石) 住居建設時の掘削で古い土器が再堆積し、新しい包含層から出土する可能性がある。試掘における出土密度から住居の広がりを推定できる。

(牛石) 東側では縄文遺物は多くないが、正確な把握にはさらなる掘削が必要であり、本調査で明らかになる見込みである。

(文審) 現地見学会の予定はあるか。

⇒事務局 本調査の現地説明会を 3 月 20 日 (木) に実施予定。

(文審) 弥生期の遺物は出土しているか。

(牛石) 過去調査で弥生中期住居 2 軒が出土している。今回も土坑は検出しているが密度は高くない。

(文審) 出土した馬骨は農耕用か。

(牛石) 馬は 4 世紀末頃から出土する。専門家の分析により体高 (推定 110~120cm) から用途を推測できる。奈良時代には雨乞い祭祀で用いられる例もある。

(文審) 過去の調査報告書が未刊行だが、資料からどの程度情報を得られるか。

⇒事務局 資料・遺物・写真の一部は失われているが現存資料もある。委員作成資料も活用し、必要に応じて地権者の同意を得た上で部分的な発掘も検討する。

5 その他

事務局より現地説明会について説明

6 閉会